

『今月の天候と農作業』

通巻第5661号

3月号

令和4年3月3日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

寒気の影響を受けにくいと、向こう1か月の気温は、平年並か高いでしょう。
高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は、平年並か少ないでしょう。また、日照時間は、平年並か多いでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	20	40	40

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 3月5日(土)～ 3月11日(金)

高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 3月12日(土)～ 3月18日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 3月19日(土)～ 4月4日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稲

1 育苗管理

育苗管理では、温度とかん水がポイントです。緑化時期では、日中は25℃、夜間は15℃、硬化時期は、日中は10℃、夜間は20℃を目安に管理します。また田植7日前頃からは、外気に慣らすようにしましょう。温度が高くと徒長しやすく、一方、急激な温度変化で低温に遭うとムレ苗が発生しやすくなるため注意しましょう。かん水は午後に行うと床土の温度が下がり多湿となるため、午前中に行いましょう。

2 本田準備

田植前までに、畦を補修し漏水防止に努めましょう。

代掻きは除草剤の効果を安定させるために、均平にすることが重要です。基肥は施肥時期が早過ぎると成分が流亡するため、代掻き頃に施用します。

3 移植作業と除草剤散布

寒波時は無理に移植せず延期しましょう。移植後は深水管理とし植傷みを軽減します。霜の予報が出た際も深水で管理しましょう。

また、いもち病対策として田植前又は田植時に箱処理剤を施用しましょう。

除草剤は、ラベルの使用時期や使用方法をよく確認して適切に散布し、散布後7日間は落水をしないようにします。

◆麦類

1 排水対策と病害虫防除

雨が多くなるため、ほ場の周囲や畦間に排水溝を設けます。

赤かび病の防除は、裸麦・小麦では穂揃期に、大麦では穂揃い期から7～10日後（蒴殻抽出期）に行い、天候を見て追加で、その7日後頃にも行います。気温が高くなると生育が早くなるため、生育を見ながら適期防除を行いましょう。

（福川 泰陽）

施設野菜

蒸散量が多くなるため、日射量の増加に応じてかん水量を増やしていきませんが、かん水間隔を短くして回数を増やすことで全体のかん水量を増やすようにします。

◆きゅうり

日射量が増加すると葉の老化が進み、草勢が低下しやすくなります。高温乾燥が原因のため、内ビニールなどを活用し、日射を弱めて湿度を確保します。高温になると果形も乱れやすくなるため、十分な換気に努めます。

また、収穫位置が上昇しやすい西側のハウスが日中に高温となる時は、サイド面に黒マルチなどで遮光を行い、生育を調整しましょう。

◆ピーマン

ハウス内が高温になると授粉がうまく行われず、奇形果の発生や果実の肥大不良による赤果等の発生につながります。十分な換気を行い、ハウス内が高温多湿にならないように管理します。

気温の上昇とともに収穫までの日数も短くなるため、最低でも3～4日間隔での収穫を心がけ、草勢維持に努めます。

◆トマト

ミニトマトは、気温上昇に伴い裂果が増加します。土壌水分の急激な変化が裂果の主な原因であるため、少量多回数のかん水を行います。

トマトは、高温で乾燥すると尻腐果が発生しやすくなるのでかん水量を増やしていきます。

◆いちご

日射量の増加に伴い施設内温度が上昇するため、ハダニ類の発生が増加します。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗をこまめに除去し、定期的な薬剤散布を行います。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆さといもやかんしょなどほ場の準備

各種病害の伝染環を絶つために、ほ場に残っている残さは可能な限りほ場外に持ち出し、ほ場外に持ち出せない残さはトラクターで耕うんを多めに行い細かく破碎します。春先に地温が15℃以上になって残さ分解が進んだ後に土壌消毒をします。ほ場や水路近くに残さを放置すると、伝染源になる恐れがあるため、放置しないようにします。無発病の畑や種芋採取用の畑、育苗ハウスに入る時は、長靴や農機具の洗浄を行いましょう。

◆さといも

早生種の定植期です。さといもは連作障害が発生するため、4年以上作付けをしていないほ場を選び、センチュウ対策を行います。また、疫病対策では、葉柄にも薬剤をかける必要があるため、植付け時には作業管理通路を10m間隔で作っておきます。

種いもは病害虫のあるもの、芽つぶれのあるもの、水に浮くものは確実に除き、センチュウや黒斑病の消毒を行います。薬剤消毒は種芋の表面にしっかり届くよう、土を洗い落としてから行います。種芋は大きき順(30～50g程度)に植付けます。

◆食用かんしょ

トンネル栽培では、換気作業を徹底します。苗床では温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎます。

育苗中に葉の萎縮・変色、地際部からの茎の枯れや黒変、芋の腐敗が見られたら速やかに撤去します。地際から5センチ以上離して苗採りし、薬剤で苗を消毒します。調整後の薬剤は日光や汚れなどで分解しやすいため、一日を目安に使い切ります。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用します。植物体への春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが最も効果的です。時期を逃さないように早めに準備しましょう。

◆ 完熟きんかん

収穫が終了したら、剪定の時期です。剪定は樹勢や樹齢を考慮し、間引き剪定を基本にバランス良く枝を配置します。剪定の遅れは枝の充実を遅らせ、一番花の結果を悪くするため、3月末までに終わらせます。

◆ 日向夏

3月に入ると露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生系から収穫を開始し、在来系は減酸を確認してから収穫します。

寒波の影響で、す上がり果の発生が懸念されます。袋掛けをしていない果実や、園地の中で特に冷気が溜まりやすい場所で樹冠表面に結果している果実は、注意が必要です。果実の大きさに対して極端に重さが軽い場合には、中身を確認してみましょう。

◆ マンゴー

今年の早期出荷作型の生育は、平年と比べるとやや遅くなっています。3月になると次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。遮光ネット等を利用し、日焼けを防止します。

後期出荷作型でこれから開花を迎える園では、早朝換気や夜間の十分な加温によって湿度を低く保ち、花の時期から病気の発生を抑制します。

2 落葉果樹

◆ 梅

開花期～展葉期にかけては病害虫が一斉に発生しますので、予防的防除や初期防除を徹底しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆ 夏秋ギク

6～7月出荷作型の定植時期となります。

6月出荷作型の「フローラル優香」は、生育期間全般で低温に遭遇すると貫生花が発生しやすくなるため、電照期間中から温度確保に努めましょう。

「精の一世」は、親株時の低温遭遇によって幼若性を獲得している場合があるため、定植後から夜温13℃以上で加温を行いましょう。

◆スイートピー

3月に入ると、気温上昇と天候不順により草勢が急速に低下しやすくなるため、施肥やかん水をこまめに行い草勢の維持に努めましょう。

また、結露による花シミの発生リスクを下げるために、循環扇の活用、換気や早朝加温などによる湿度低減対策を行いましょう。

◆デルフィニウム

3月は気温の上昇に伴って茎が軟弱になりやすいため、日中の換気を十分に行うとともに、必要に応じて葉面散布等による追肥を行ってボリュームの維持に努めましょう。

◆ホオズキ

8月出荷作型の植付け期となります。萌芽時の生長点の焼けを防ぐために、マルチの穴あけは遅れないように行いましょう。

また、気温の上昇に伴ってハウス内への害虫の侵入が多くなるため、防虫ネットの設置やほ場周辺の除草は早めに行いましょう。

◆ラナンキュラス

3月に入ると気温が上昇し、草勢が低下しやすくなるため、かん水や低濃度での追肥をこまめに行いましょう。

また、花シミや灰色かび病の発生防止のために、循環扇の活用や微生物農薬のダクト散布を継続して行いましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

令和4年2月14日現在、全国10県において16例の鳥インフルエンザが発生しています。また、県内に飛来する野鳥からもウイルスが確認されており、野鳥が営巣地に帰る4月までは、養鶏場への侵入リスクが高い状況が続きます。農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

今月は外気温の日較差が大きくなることから、家畜や家禽の免疫力が低下しやすくなり、呼吸器病等の感染症が発生しやすい時期となります。気温が上がる日中は畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回すなど、換気を十分に行いましょう。また、乾燥する時期は埃や塵が多く、呼吸器病の原因となりやすいため、細霧器等を使用して湿度を適度に保つなど、畜舎内の温湿度環境を整えましょう。病気の発生時は早期に対処できるよう、家畜の健康状態の確認を徹底しましょう。

◆飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの収穫作業等が始まりますので、飼養管理に影響が出ないように、計画的に作業を行いましょう。また、作業に向けて収穫機械等の点検を行いましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 春整枝

春整枝は、2月下旬～3月上旬の平均気温が10℃となる頃を目安に実施しましょう。整枝の高さは、葉層を8センチ程確保できるように、去年の最終摘採面から3～5節程上げた位置としてください。

また、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽に掛からない高さで丁寧に整枝しましょう。但し、越冬芽の寒害（芽つぶれ）が多発している場合は、1～2節程度刈り落としてください。

2 芽出し肥の施用

芽出し肥は、一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性肥料を施肥してください。各地域の施肥基準に準じ、うね間だけでなく雨落ち部まで幅広く施肥しましょう。施肥後は、流亡防止と分解促進のためうね間を軽く攪拌しましょう。

3 防霜対策

防霜対策は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、春整枝した茶園では春整枝直後から開始し、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施しましょう。防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3℃、一～二葉期は5℃、二葉期以降は7℃としてください。

スプリンクラーで防霜する場合は、摘採面の気温が萌芽期前後は0℃、一～二葉期は1℃、二葉期以降は2℃になったら散水を開始するようにしましょう。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。春整枝と裾刈り後は、速やかに地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布してください。

5 定植

露地で育苗した苗の定植は、2月下旬～3月中旬が適期です。ハウス等の施設内で育苗した苗は、定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）の定植が適切です。

（松尾 啓史）

◆しいたけ

一 採取

発生したシイタケは、目標の品柄に応じて適期に採取します。

雨子での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になるため、なるべく晴天を選んで採取します。また、ほだ木の表面を傷めないように丁寧に採取します。

採取容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上に入れて入れます。採取後は、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぐため、速やかに乾燥します。特に雨子は素早く処理します。

二 乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温・湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げます。

(堀川 和也)

◆たばこ

今月は、本畑への移植となります。品質・収量の確保に向けて適期・適切に健苗の移植に努めましょう。

移植は、葉数が九～十枚（米粒大の心葉まで含めた枚数）で、白い根が肥土全体を覆っている根張りの良い苗を選んで行ないましょう。

葉数が少ない小苗を移植すると、本畑での活着と生長が遅くなり、また大苗では、本畑初期の低温による不時発蕾（葉数減少）を生じやすくなります。

植穴は、直径十～十三センチメートル、深さ十三～十五センチメートル程度に揃えましょう。

極端な深植え、浅植えは、初期生育が遅れ、不揃いの要因となります。

また、移植の際は、抱土が露出しないよう注意しましょう。抱土が露出していると乾燥し、根の伸張が悪く、活着が遅れ、不揃いの要因となります。

移植後は、移植した苗の確認手直しを行ない、活着促進に努めましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

3月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	育苗時の発生の有無に関わらず、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ	—	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。貝の生息量が多い場合には、防除薬剤の本田施用を実施します。
施設野菜類	病害全般	—	天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、夜温が高めの加温機が稼働しない日は、施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	うどんこ病 べと病 灰色かび病 褐斑病	並 やや少 並 やや少	発生が多いハウスでは、7日間隔で複数回の連続防除を実施します。また、薬剤の感受性低下（耐性菌の出現）を防ぐため、異なる系統の薬剤を用い、ローテーション散布を行います。
	黄化えそ病 (MYSV) ミキアザミウマ	やや多 並	黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤が付着しにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	ウイルス媒介虫でもあるアザミウマ類、コナジラミ類などに対して、抜根する前の防除を徹底し、抜根後は少なくとも20日間は蒸し込みます。次作の定植時に薬剤を施用し、防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	やや多 並 並	うどんこ病は乾燥、斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。また、発病葉は伝染源になるため、適宜除去し園外に持ち出します。
	ミキアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	並 並 やや多	いずれの害虫とも、今後、暖くなるにつれて増殖速度が速くなります。特にアザミウマ類の発生が多いハウスでは、最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 うどんこ病 タバココナジラミ	並 並 並 多 並	葉かび病、すすかび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。うどんこ病の発生が多くなっています。多発すると防除が難しくなるので、発生が少ないうちに防除を徹底します。 タバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類 アブラムシ類 ヒラズハナアザミウマ	やや少 並 やや少 少 多	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうちに定期的な防除を行います。 ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群がいるので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 ヒラズハナアザミウマは寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがあります。低密度時に防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 並 並	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。 ミカンハダニの生息密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季（3月上中旬、萌芽前）にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	やや多	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期（～3月中旬）です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するよう丁寧に防除します。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。

